ヨコマガ

2014.02

ヨココクキャンパスマガジン

特集：コミュニケーション力って何だ。

コミュニケーション力を考えよう
グローバル企業訪問
ONE CAMPUS の魅力
さあ、議論をしよう
トモダチつながりMAP

ヨココク読書部
先生の横顔
情熱大学

YNU
横浜国立大学

通刊55号

コミュニケーション力って何だ。

What's the communication skill?

そもそも人は何故、コミュニケーションしなければならないのでしょうか。
我々が歴史的に知る限り現代に通用するその大きな要素は、
狩猟民族にしても農耕民族にしても組織を構成して
みんなで協力しあって生存するための糧を得る必要があったからだと推測されます。
その当時、コミュニケーションがとれていない人々はよそ者として排除される、
または他の組織と争いを起こしていたはずです。
さて、今日のIT時代ではどうでしょう。
確かにITは、人同士のつながりに大いに役立っています。
しかし、真のつながりはアナログの世界にこそあるはずです。
生の声、雰囲気等々を感じあう、
これなくして本当のInformation（情報）は獲得できないでしょう。
五感でつながるコミュニケーションこそが人生のあらゆる場面で重要ではないでしょうか。
YNUの4つの精神もこうしたことの上に成り立っています。
多様な人々の意見を参考に社会に役立つ勉学や研究（実践性）、
国内外の学生・研究者と協調した最先端の成果の創出（先進性）、
地域や国そして世界の課題を解決する教育・研究（開放性）、
異文化を理解した諸外国との交流（国際性）、
これらを達成するには真の情報共有が不可欠です。
まずは自分に少しでも関わりのある人々とつながってみること。
自分を好きになってもらうこと。
スタートは「おはようございます」「こんにちは」「こんばんは」といった
大きな声での挨拶から始めてみてはどうでしょう。
自分を知ってもらえれば、相手のことも自然に知ることになります。
つながり力が情報の源です。
最後に大きな声で『ガンバレ！』。

広報委員会 委員長（理事・副学長）　山田 均

■COVER PHOTO / 片山恭助 2013年度大学祭実行委員長 教育人間科学部3年 / 関連記事は8Pに掲載中

自分の考えを伝える力？相手の考えを理解する力？“コミュ力”とは違う？
今、社会が求めるコミュニケーション力について、
ヨココクの学生はどんな風に考えているのかのぞいてみましょう。

社会が求めるコミュニケーション力。一言でいうと何だと思いますか？

異なる背景を理解し自分の意志をきちんと言語化することがコミュニケーションではとても重要。

国籍に縛られない組織で
新しい価値を生み出す。
世界ではそんな働き方が
すでに始まっています。
100言語、50ヵ国以上で
サービスを提供するグーグルに
学生2名が訪問し、
グローバル企業で働く醍醐味、
難しさをうかがってきました。

国内ベンチャー企業から、グローバル企業への転身。

椿 今、どんなお仕事をされているのですか？

大木 大手企業のビジネス拡大をサポートするために、ＡｄＷｏｒｄｓと呼ばれるインターネット広告を提供しています。例えば、企業がターゲットとする若年層がどんなデバイスを使い、いつ、何を検索し、どんなサイトを見ているのかを分析しながら、ユーザーにとってもクライアントにとっても良い接点を生み出すために日々頭をひねっています。また、ひとつの広告ソリューションがすべてにあてはまることは決してありません。だから業界担当チームを作り、私は人材業界担当として、求人サイトや転職サービスを運営するクライアントにフィットした提案を考えています。

友清 グーグルは新卒入社ですか？

大木 ヨコクを卒業して最初は人材サービスのベンチャーに入社したんです。実は大手の自動車メーカーからも内定を頂いていたのですが、この変化の激しい時代の中で、企業内で自分の価値を高めるより、企業に依存しない「市場価値」に魅力を感じ、自分の足で立ち、自分でビジネスを考えたいと思いベンチャー企業に進みました。

椿 そこではどんな仕事に携わったのですか？

大木 ライター、営業、社長直下の部署で新規事業の立ち上げなど様々なことをさせてもらいました。

友清 なぜグーグルに転職されたのですか？

大木 ２００８年にリーマンショックがあって、人材業界は大打撃を受けたんです。当時新規事業企画をしていたのですが、社員がどんなに頑張っても景気といった外部影響によってビジネスが大きく左右してしまう業界構造に悔しさを感じていました。普遍的な価値を生み出すサービスって何？と考えていた時にグーグルに出会いました。前職ではいくつかサービスを立ち上げましたが１社が業界に与えるインパクトには限界がある。でもインターネットというインフラの力があれば人材業界全体を底上げして変革を起こせるかもしれない。そう思ったことが最初のきっかけでしたね。

椿 グローバル企業ということも重要なポイントでしたか？

大木 そうですね。市場がグローバル化していることは日々実感していましたし、自分自身がグローバルで活躍できる人材にならなくてはと思っていたので、いろんなバックグラウンドや考え方を持った人たちの中に身を置いて働きたいという気持ちはありました。

意見をきちんと主張する。意見を柔軟に受け入れる。

友清 実際に入社されてみて、想像通りグローバルな環境でしたか？

大木 想像以上ですね。グーグルでは海外のオフィスと常につながっています。世界中の社員の知見が共有されていて、ビデオチャットで海外とのミーティングも頻繁に行われています。オーストラリア、シンガポール、アメリカなど様々な国から『意見を聞かせてほしい』とミーティングが入るんです。

友清 すごいですね。やはり英語力は絶対必要ですか？

大木 だから猛勉強中ですよ。国籍も文化背景も異なった仲間とのコミュニケーションでは語学力はもちろん大切ですが、意志をきちんと表明できるかどうかも非常に重要。日本人同士なら以心伝心でなんとなく汲み取ってもらえることも、ここでは言葉にしなければ無と同じです。でも、だからといって主張するだけでなく、どんな考え方も受け入れられる柔軟さも同時に求められます。

椿 他にもグローバル企業だからこそ大切にしていることはありますか？

大木 そうですね、育った国も文化も異なる人同士で議論をする場合には、お互いの「前提」を最初にすり合せることが大切です。日本の常識が必ずしも世界の常識とは限らない。ツーカーを期待したらダメです。

コンフォートゾーンを抜けるクセをつける。

椿 話は変わるのですが、大木さんはどんな学生生活を過ごされていましたか？

大木 ダンスサークルの「Ｒ３ｕｄｅ（ルード）」でストリートダンスをしていました。あとは色んな人と話したかったのでバーテンダーのバイトもしていましたね。それから毎年３週間はバックパッカーとして世界中を旅していました。卒業前の最後の旅は、往復の航空券だけ買ってあとは行き当たりばったり！なんて旅でした。

友清 その頃の経験は今に活きていますか？

大木 「コンフォートゾーン」を抜けるクセ」、つまり、心地よいと思う状況からあえてチャレンジングな領域に挑んでみる習慣をつけたことは今に繋がっているかもしれません。例えばＲ３ｕｄｅに入ったのも、「あのステージで３００人を前にして自分を表現できたらきっと変われる」と思ったからなんです。どちらかと言えば人前で話すことすら苦手な方でしたからね。かっこよく踊って目立ちたいという気持ちは少ししかありませんでしたよ（笑）

椿 ヨコクは多様性のあるキャンパスだと思うのですがどうでしたか？

大木 留学生がたくさんいましたし、文系理系がワンキャンパスにあり、しかも日本全国から人が集まっていましたから、いろんな考え方があることを自然と体感できる環境だったと思います。

友清 これから挑戦していきたいことを教えていただけますか。

大木 2つありまして、1つは海外の拠点で働いてみたいと思っています。海外で自分がどのくらい通用するのかチャレンジしてみたいんです。そしてもう1つは世の中にまだない新しい価値を生み出したいという野望ですね。将来的には社会でうまくいっていないことがうまく回り出して、社会が大きく変化するような価値を作りだしたい。そんなことを考えています。

様々な考え方、価値観に学生時代から触れてほしい。

友清 最後に。大木さんにとってコミュニケーション力とは何でしょう。

大木 難しいですね。でもあえて言葉でいうとすると「翻訳力」でしょうか。言い換えると、相手の背景に合わせて伝わるように話せるかどうかです。そのためにはまずは相手を知ること。そして先入観なくフラットに接する姿勢が大切です。世の中には実に多くの価値観があり、多様性に満ちていることを体感することが最初の一歩かもしれません。

友清 グーグルはそれらの力が研ぎ澄まされる環境ですか？

大木 そうですね。大きなプロジェクトを動かすためには違う部署や違う国の人と連携する必要がありますし、だからこそここには、すぐに集まって気軽にミーティングができる仕掛けがたくさんあります。例えば会議室や立ち話がしやすいスペースがいたるところにあるのはそのためなんです。さらに、ひと度社内のネットワークに意見を求めれば世界中の社員から一瞬のうちに意見が集まってきます。ＧＩＶＥ＆ＧＩＶＥ。社会をよりよい方向に変えていくために本当に志の高いメンバーが集まっていると思います。

椿 そうなんですね。私は今、就職活動の真っただ中ですので、働き方を考える上でも今日お聞きしたお話は本当に勉強になりました。本日はありがとうございました。

友清 ありがとうございました！

ONE CAMPUS COMMUNICATION

文系学部、理系学部、留学生。すべての学生がひとつのキャンパスに集まるヨココク。
ONE CAMPUSには、さまざまな人とコミュニケーションをとるチャンスが溢れているのです。

学生国際ボランティア

学生の立場からヨココクの国際的活動をサポートするキャンパス・ボランティア。多くの留学生と日本人学生が一緒に活動しています。

アメリカからの訪問団にキャンパスをご案内

語学力ってやっぱり大切です。

共通の言葉で話すことと、相手の文化を尊重する気持ちがあってはじめて信頼できるコミュニケーションが生まれると思います。それに気づかせてくれたのが、学生国際ボランティアの活動でした。目指すは、更なる国際的な団体！もっとたくさんの国の言葉や文化を知って、交流してみたいと思っています。

楊 歓
環境情報学府
博士課程前期 2年

留学生との交流で私は変わりました。

本当はふれあいたいのに、初めは留学生に話しかけることに気が引けていました。そんな自分を変えたのは、グローバルカフェやディスカッションでの交流です。ここには留学生に話しかける機会、留学生の話を聞く機会の両方があります。座学の授業で学ぶことだけでは身につかない「相手を理解する力」を磨くことができると思います。

大澤高史郎
経済学部 2年

大学祭実行委員会

ヨココク屈指の人気サークルをマネジメントする実行委員長には、どんなコミュニケーション能力が求められるのでしょうか。

一緒にがんばった実行委員

感動のフィナーレ

「1+1」は10にもなる！

企画部、物品部、総務部など、いくつもの部局がある大学祭実行委員会。どうしても組織間で温度差が生まれてきてしまい、時には言い争いが起きて、雰囲気が悪くなることも。1～2年生の時、いちスタッフとして動きながら「もっとみんなが楽しく働けるようにしたい」と思い、3年生で実行委員長になりました。空気が悪くなると、怒っている人をあえてイジってみたり、さぼっている人に軽く注意するなど、ぐいぐい引っ張るリーダーではなく、人間関係をよくするクッション材のような存在を目指して活動。その中で気づいたことは、相手の考えを理解し、人と人の関係をよくすることで、複数人のアイデアがかけ合わさって「1＋1」が3にも10にもなるということです。

片山恭助
2013年度大学祭実行委員長
教育人間科学部 3年

YNU 大岡インターナショナルレジデンス

YNU大岡インターナショナルレジデンス

ウィンターパーティ

大岡にある留学生、日本人学生、外国人研究者、大学教職員がともに暮らす共同住宅。館内に居住するスチューデントサポーターは、留学生の相談役です。

国によって「あたり前」がちがう！

いろいろな国の人が生活していると、中にはキッチン周りの備品など、みんなの共有物を部屋に持って帰ってしまう留学生もいます。日本人では当たり前の感覚も、国によってはちがう。そこに気づくと、相手の気持ちを理解しようとする姿勢の大切さを実感しますね。

北村宗平
国際社会科学研究科
専門職学位課程 3年

英語って、ひとつじゃないんだ。

留学生が話す英語は、国によって発音がまったく違います。その特徴に気づくまでは聞き取って理解するのがとても難しかったです。将来、研究者として生きていくには、英語は欠かせませんが、いろいろな国の英語を理解する力が必要だと感じました。

神藤拓実
環境情報学府
博士課程後期 1年

自分から話しかけることが大切。

留学生をサポートすることより、ふつうの会話をすることが多いですね。留学生は話しかけると、すごくたくさん話をしてくれて、日本に興味があるんだなと気づきます。ここでの生活を通じて、自分から話しかけることが、コミュニケーションの始まりだと改めて実感しました。

西海保洋
工学部 3年

コミュニケーション力とは、まわりを巻き込んだ「変革」を起こす原動力。

Professor
国際社会科学研究院
准教授
山岡 徹

山岡准教授は民間企業の人事部で働いた経験を持つ

コミュニケーションの主体は自分か、相手か。

企業や組織の変革マネジメントを研究する山岡徹准教授（国際社会科学研究院）は、近年、コミュニケーションにおける主体が「自分」よりも「相手」を重視する傾向になっていると語る。

「以前は伝えたいことの論点を明確にすることが企業では求められました。しかし最近では『相手に聞く耳を持ってもらえる伝え方』が重要になっているんです。」

その背景には大きく2つの理由が考えられる。1つは雇用形態の多様化、多国籍化、女性の社会進出など労働環境が変わったことで、立場の違う人とチームで働く機会が増えたこと。もう1つは経営層が「変革」を強く進めていることだ。ただ、トップが変革に向けて熱いビジョンを語る時は、同時に現場がシラケる瞬間でもあると山岡准教授は指摘する。

「現状の延長線にある未来を目指せばいい頃は、数字や形で示せばいいのでビジョンを伝えることは比較的簡単だったんです。でも大きな変革の先にある未来は、まだ誰も見たことのない姿。だからこそ、自分じゃなくて相手の立場に立って、相手がワクワクできる将来イメージを持ってもらえるコミュニケーションが求められるんです。」

議論ができるのは相手を信頼できている証。

山岡准教授は、最近学生を見ていて気になることがあるという。

「場の空気を読みすぎて議論が成立しないんです。断定的な言い回しを避けて、すごく遠回しな言い方になったり。相手を極力傷つけないようにするんですね。その反面、些細な言葉に傷つきやすい若者が増えているようにも感じます。」

相手の顔が見えない分、細心の注意を払ってメッセージを送るメールやSNSの習慣が、リアルな会話の場に影響を及ぼしているのかもしれない。

「でも突き詰めて考えると相手を思ってのことなのでしょうか？何を守っているんでしょう？」

山岡准教授からのメッセージ

人との違いを恐れる必要はない。
違うからこそ一緒にいる理由がある。
そのことを前提に意見をぶつけ合い、
信頼関係を築ける人になってほしい。

若い人に限らず、日本人には自分の主張に対して理由をきちんと説明することが苦手な人が多い。だから質問されるとうまく答えられず、自分が責められているように感じてしまうのかもしれない。結果、議論すること自体をお互いに避けてしまう。しかしそこは訓練で少しずつ鍛えることができる。

「私のゼミではディベートを行っています。ディベートは発言に常に根拠が求められますからね。いつも意見と理由はセットです。でも実は本当に大切なのは相手を論破することではないんです。熱く討論を戦わせても、相手との人間関係が壊れないという経験を重ねることが大切。あと、聞いているギャラリー（第三者）からどれだけ自分たちの主張に賛同を得られるか。議論を通してまわりにも影響を与え、動かしていけることがコミュニケーションの醍醐味であり、変革の原動力にもなるんです。」

専門は「組織における変革マネジメントについての経営学的研究」

トモダチつながりMAP

クラス、サークル、ゼミはもちろん、アルバイトなどを通じて、
さまざまなトモダチとつながるキャンパスライフ。
広い交友範囲は、コミュニケーション力にも影響します。

大小田万侑子
教育人間科学部
学校教育課程
美術専攻 3年

クラスメイト

ともちゃん

東京に住み、おしゃれなカフェもよく知る都会人のゆみこ。ともちゃんは2年連続でクリスマスイブをともにすごした親友です。

ゆみこ

サークル

まゆぴ

サークルはちがう学年の人とも出会えるところ。ダンスサークル「LIZ」のまゆぴは年下だけど、対等に将来のことも話せる存在です。

ゼミ

みつきさん

彫刻のゼミのメンバーは、4人。みつきさんは、4年生で卒業制作に奮闘中。先輩としていろいろなことを教えてくれます。

プライベートのつながり

ちいちゃん

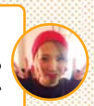
塾講師のアルバイト

アルバイト先で仲のいい2人とはよく遊びます。服飾を学ぶちいちゃんとの会話は、自分の知らない世界に触れられて刺激的。

今村くん

ラーメン屋のアルバイト

オープンスタッフで始めたアルバイト。年上のゆうきさんはギャル系で、ヨココクにはいないタイプのトモダチですね（笑）。



ゆうきさん

地元

2人とは、小学校時代からの仲良し。あきとツイッターで連絡をとったことから、最近また3人で遊ぶようになりました。

あき

まりな

クラスメイト

美馬光司
教育人間科学部
学校教育課程
美術専攻 3年

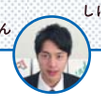
キャンパスのつながり

しんいち

ゆーの

クラスメイト

去年も10人くらいで城ヶ崎へ泊まりがけで遊びに行ったクラスメイト。いろんなキャラがいておもしろいです。



しゅん

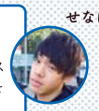
しほこ

中村さん

ゼミ

才能豊かなしゅん、デザインセンスに共鳴できるしほこ、いじられキャラの中村さん（笑）。デザインゼミには、ともに夢を目指す仲間がいます。

ばやし



せなにー

ダンスサークル

120人のメンバーが集まるインカレのダンスサークル「R3ude」。他大学の仲間とチームを組んで練習に励んでいます。

れいこ

わっきー

テニスサークル

イベントや夏合宿など、何かと忙しいサークル。チラシ係を務める3人とは、イベント前になるといっしょにバタバタするのが恒例（笑）。

あや

じゃっきー

山崎さん

リサイクルショップのアルバイト

アルバイト先で週に一度会うフリーターの山崎さんとは、「あのイベント行った？」など、いつもデザインの話をしています。

寺田さん

デザイン学校

30代の人も多いデザイン学校。論理的な考え方ができる寺田さんは、同級生にはない影響を与えてくれる人です。

あやこさん

ヨココク読書部

今号に登場していただいた学生をはじめ、教員、職員、卒業生などヨココクに関わるさまざまな方からお勧めの一冊をご紹介。気になる書籍があったらぜひ読んでみてください。

お勧めの本を募集しています。

ヨココク読書部では、あなたのお勧めの一冊を募集しています。本のタイトル、著者名、お勧めコメントをご用意の上、ご連絡ください。

【ご連絡先】ヨココク読書部
TEL：045-339-3016
FAX：045-339-3179
E-mail：press@ynu.ac.jp

『最高裁回想録- 学者判事の七年半』
藤田宙靖 著

国際社会科学研究科
専門職学位課程 3年
北村 宗平

先日、ご講演に来ていただいた最高裁判事の回想録です。「最高裁判例とはいうけど、どういう人が書いているの？」と気になる方は是非読んでみて下さい。

『ジョーカー・ゲーム』
柳広司 著

経済学部 2年
大澤 高史郎

戦時中、日本軍部に卑怯だと忌み嫌われたスパイ機関が暗躍する小説。
スカッとしたい方にオススメの一冊！

『生き方』
稲盛和夫 著

環境情報学府
博士課程前期 2年
楊 歓

「人間として、何のために生きるのか」、「人生をよりよく生き、幸福という果実を得るには、どうすればよいか」という質問への答えを、この本から探せます。

『あしたはうんと遠くへいこう』
角田光代 著

経営学部 3年
椿 菜々

泉の15年に渡る恋愛遍歴11篇。一言で言うと「痛い」。うわ～わかる、でもわかりたくない！の連続がクセになる一冊。

『20歳のときに知っておきたかったこと ースタンフォード大学 集中講義ー』
ティナ・シーリグ 著

国際社会科学研究院
准教授
山岡 徹

スタンフォード大学の起業家育成コースで教鞭をとるティナ・シーリグ女史による著作。起業に関心のあるチャレンジャーよりも、むしろ受け身の人生を変えたいすべての人に。

『英語は絶対に逆から学ぶな』
崔宰鳳 著

環境情報学府
博士課程後期 1年
神藤 拓実

韓国人留学生推薦。日本語・韓国語の流れで英文を後ろから訳して読むのではなく、英文の順番のまま理解する。英語のスキルアップに役立つ本だと思います。

『文・堺雅人』
堺雅人 著

経済学部 2年
田中 郁也

「半沢直樹」などの好演で実力派で知られる堺さんのエッセイです。役者論から映画論まで、彼の教養の広さと人柄の良さが伝わってきます。

『翼 cry for the moon』
村山由佳 著

教育人間科学部 3年
柴田 綾香

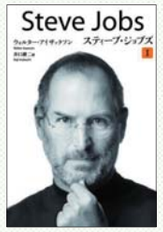
心に深い傷を負って生きてきた真冬。一度は幸せを掴みかけたものの更なる過酷な運命が真冬を襲う。本当の意味での自由とは、幸せとは何かを考えさせられる作品です。

『菊と刀』
ルース・ベネディクト 著

教育人間科学部 3年
片山 恭助

70年前の本ですが、当時の日本人ってこんなふうに見られていたのかと、米人学者の鋭い考察で「日本人」を客観的に捉えることができる面白い一冊です。

『スティーブ・ジョブズ』
ウォルター・アイザックソン 著



工学部 3年
西海 保洋

彼の人生や生き方が書かれ非常に興味深い。漠然と生きる学生に少し刺激を与えてくれるかもしれない1冊。

『砂漠』
伊坂幸太郎 著

教育人間科学部 3年
美馬 光司

中学以来、初めて夢中になった本です。平凡な大学生活なのにワクワクする。そんな青春時代にのめり込める作品です。

『崩れ』
幸田文 著

都市イノベーション研究院
教授
小長井 一男

幸田文（あや）は明治の文豪、幸田露伴の次女。5歳で母親を亡くし父親の厳しい躾（しつけ）を受ける。その彼女が人生の最晩年に切なくなるほど荒涼たる崩壊地に惹かれていく。

『竜馬がゆく』
司馬遼太郎 著

経済学部
昭和40年卒業生
山本 史枝

歴史、ミステリー、ホラー何でも読みますが司馬遼太郎が一番好きです。『坂の上の雲』とこの本はハードカバーで持っていて宝物のように大切にしていました。

『蹴りたい背中』
綿矢りさ 著

理工学部 2年
天野 春樹

04年、作者が芥川賞を史上最年少で受賞したことで話題になった作品です。青春小説ですが、ちょっと変わった雰囲気でおもしろいです。

あの先生の知られざる横顔

小長井一男 教授

大学院都市イノベーション研究院教授。工学博士。長岡技術科学大学工学部助教授、ヒューストン大学工学部土木工学科研究員、東京大学生産技術研究所教授を経て現職へ。専門は地震工学、地盤工学。これまでに国内外43地震、153回の調査に関わり、東日本大震災の分析にも関わっている。

能と土木。一見関係のない2つがつながってきた。

湿度などの条件で“鳴り”が変わる繊細な楽器

能と出会い、プロになることも考えた。

大学に入学したら演劇をやりたいと思っていたんです。ところが能の研究会に引っ張り込まれて、意図しないところから能との関係は始まりました。当時の能の研究会には謡手と舞手しかおらず、物足りなさを感じ本格的に鼓を習いたいと師匠に弟子入りしたんです。博士課程を終えるまでずっと通い詰めて腕を磨きました。

初めて自分の鼓を持ったのは大学生の時。同じ師匠についていたお弟子さんから譲り受けました。当時の金額で6万円。1ヵ月の生活費が3万円でしたので、学生の私には非常に高価なものでした。でも相場からしたら破格に安かったんです。親に頼み込んで仕送りを前借りさせてもらって手に入れた時は本当にうれしかったですね。

大学院を出てからは忙しくなり気がついたらブランクは20年。そんな時、師匠のお孫さんが亡くなったという知らせを受け、お見舞いに同ったらとても喜んでくださったんです。私もうれしくなり「鼓を再開します！」と宣言してしまい今に至ります（笑）。今日持ってきた鼓はその師匠から譲り受けたもの。江戸以前に作られたと思われる大変貴重なものなんです。

愛用の鼓を前に語る小長井教授

能と土木のつながりに思いを馳せる日々。

能のシナリオには脇役として僧がよく出てきます。そして彼らには土木に関する高度な知識があったことを思わせる史実が数多く残っています。中国で最先端の技術を学び、杖を突いた場所から水を出した空海をはじめ、東大寺の建立に貢献した行基などが、技術をどう考え、世の中をどうしようと考えたのか大変興味深いものがあります。

私が専門にしている地盤工学は、実は学生時代には一番やりたくなかった分野です。数学的に美しい波動論を専門にしていたのですが、地震の研究をすればするほど、被害の元凶は揺ればかりではなく変形する地盤であると感じ、結局は地盤の専門家になっていました。その流れと並行して能の中に出てくる僧たちのエピソードに興味が湧いているんです。不思議なものです。今では土木工学演習で土木と暮らしの関係を考えるために平家物語や方丈記も題材にしているほどです。

謡本は学生時代から使い込んでいる

情熱大学

部活動やサークルなど課外活動に取り組むヨココク生の奮闘記。第8回目は、学生ビッグバンドサークル「BaySound Jazz Orchestra（通称BJO）」を直撃。

音楽を楽しむ毎日の先にある、大きな舞台と、大きな楽しさ。

創設4年目にして、大舞台へ。

2013年8月18日。全国の学生ビッグバンドが目指す年に一度の大舞台、第44回YAMANO Big Band Jazz Contest全国大会の最終日。創設4年目にして初出場となるBJOは、2500人の聴衆が待つ会場に足を踏み入れた。

「ぶだんから入賞バンドの演奏が入ったCDをよく聴いていて、インターネットで動画も見ていました。ステージの上にかかった「YBBJC」のボードを見て、『ぼんとうに自分がここでやるのか』という信じられない気持ちでした」。

ドラムの田中郁也さん（経済学部 経済システム学科2年）は、当日の気持ちをこう振り返ってくれた。この全国大会に出場するには、予選を勝ち抜かなくてはいけない。出場権が与えられるのは、東日本エリアで10組。BJOは5月の予選に向け、3月に動き始めた。まずはサークル内で出場したいメンバーを募集。希望者の多かったテナーサックス、ドラムはオーディションを行い、メンバーを決めていった。

田中さんは、次期コンサートマスター

すべては、音楽を楽しむために。

予選直前のゴールデンウィークには、河口湖で合宿。合奏のリーダーであるコンサートマスターを中心に精度を高めていったが、トランペットを担当し、マネージャーも務めた柴田綾香さん（教育人間科学部 学校教育課程 3年）は予選通過を想定していなかったという。

「『何も準備していないのに、全国大会までの3カ月で3曲も仕上げなきゃいけない。どうしよう』と（笑）。練習も増やさなくてはいけないので、他のサークルに『全国大会なんです。2時間だけ譲ってください』と練習場も必死で確保していました」。

メンバーから出た候補曲の中から、プロのアドバイスをもらって演奏曲を決定。新潟合宿では、朝まで個人練習するメンバーもいた。あっという間に3カ月がたった。本番は「とにかく楽しかった」と田中さんは言う。

柴田さんは教育実習とも両立して練習に励んだ

「全国大会が終わってから、運営側から演奏中の写真が送られてきたのですが、みんなすごく幸せそうな顔をしていたんです。僕は最後に大きなミスをしたのですが、それもいい思い出です（笑）」。

惜しくも入賞は逃したが、初出場にして上位20位に入ったことは快挙。同時に、来年のシード権も獲得した。天野春樹さん（理工学部 物理電子情報系学科2年）は、バンドマスターとして、新しいチームを率いていく。

「他大には、レギュラーとそれ以外のメンバーが分かれ、ギスギスした雰囲気のチームも多くあります。『YBBJC』への出場が決まっているので練習量は増やさなくてはいけませんが、今の仲がいい雰囲気は壊したくないですね。初心者から始めた僕がここまでやってこれたのも、『楽しむ』をテーマにしたサークルだからだと思うんです」。

初心者からのスタートというトランペットの天野さん

ヨコマガ
二〇一四年二月　毎年二回発行　Vol.55　編集・発行　横浜国立大学　広報委員会　〒二四〇―八五〇一　横浜市保土ケ谷区常盤台七九―一
編集長　山田均（広報委員会委員長）　製作・進行　横浜国立大学　学務・国際部学生支援課／同教務課／総務部広報・渉外室

卒業生を訪ねて

YNU温故知新

最前列にいるのが山本さん。黒澤清先生から贈られた漢詩を手にゼミの仲間と。

山本史枝さん
昭和40年経済学部卒業

公認会計士。世界的な会計事務所であるプライスウォーターハウス（現プライスウォーターハウスクーパース）を経て、企業、学校法人、公益法人など多くの監査に携わる。現在は監査法人・税理士法人協和会計事務所の顧問を務める。

先生との出会いが未来を変えた。

最初から公認会計士志望だったわけではないのです。それどころかどうすればお祭り騒ぎができるかをいつも考えている学生でしたね。当時、経済学部２００人中、女性は私１人だけ。学祭の時などは、水を得た魚のごとく模擬店を盛り上げていましたね（笑）。一方で会計界の天皇と言われていた黒澤清先生（当時学長）をはじめ、宮崎義一先生、山辺六郎先生など錚々たる教員陣からは多くの刺激を受けました。ゼミの教師だった黒澤先生から推薦状をいただき、外資系の会計事務所を訪ねたことが今のキャリアの始まりです。英国製のスーツ、実力主義、高い報酬。公認会計士の仕事すべてが魅力的に映り「これだ！」と思ったんです。猛勉強の末、公認会計士に合格。埼玉県では女性初だったようで新聞社から取材を受けたりもしましたね。

傍からみたら男社会の中で大変な仕事に見えたようですが、大学時代に男子学生の中で一人たくましく過ごした私ですから、仕事は実力を競い合う楽しいものでした。特に男社会を意識していなかったように思います。公認会計士は経営者と社会の公器たる会社をつくっていく仕事。問題点があれば根本から改善することを心がけてきました。何十年もたって「お陰さまで良い会社になりました」と感謝の言葉を頂いたりすると本当にこの仕事をしてきてよかったと思います。

勉強はゴールへの近道。

楽しい学生生活を過ごしましたが「もっとちゃんと勉強しておけばよかった」と今は思いますね。目標を持って早くから勉強すればゴールは確実に近くなる。だから今の学生さんたちには、私の反省も込めて、ゼミを選ぶ頃までにはやりたい仕事（ゴール）を見つけて、そこに到達するための勉強を早く始めてほしいんです。仕事は一生モノ。やりがいのある仕事を見つけ、自分で掴みとるもの。ぜひより自由で、楽しく、やりがいを持って働ける人生を切り拓いてください。